

## オランダの大学におけるIRの役割

小湊, 卓夫

佐藤, 仁

森, 雅生

高田, 英一

<https://hdl.handle.net/2324/18894>

---

出版情報 : 日本高等教育学会 第13回, 2011-01-19  
バージョン :  
権利関係 :

# オランダの大学における IR の役割

## — 内部質保証への貢献 —

○小湊卓夫 (九州大学)    ○佐藤 仁 (福岡大学)  
○森 雅生 (九州大学)    ○高田英一 (九州大学)

### 1. 発表の目的

本発表の目的は、オランダの大学における Institutional Research (以下、IR とする) の役割について、内部質保証にどのように貢献しているのかという観点から考察することにある。

発表者は、日本の大学における IR の可能性を探ることを目的に、海外の事例を調査・分析してきた。昨年度はアメリカの大学における IR の実態を調査し、IR が機能する背景を外部環境、テクノロジー、人材の三つの観点から分析した (森他 2009)。本発表は、アメリカとは異なる海外の事例としてヨーロッパに着目し、なかでもオランダの IR の実態を分析するものである。オランダを事例として取り上げる理由は、大学評価の動向との関連で IR の機能・役割を分析できると考えたからである。後述するように、現在のオランダではボローニャ・プロセスの影響の下、従来の自律的な大学評価とは異なるアクレディテーションのシステムが整備されている。こうした大学評価の展開の中で IR はどう機能するのか、どういう役割を担っているのかという実態の一端を解明することは、認証評価や国立大学法人評価の導入を一つの契機として議論され始めている日本の IR の姿を追究する上で重要な示唆を与えてくれる。

なお本発表にかかる先行研究としては、米澤 (2000) や林 (2006) 等が挙げられるが、これらの研究は大学評価システムを解明することに主眼が置かれている。アクレディテーションが求められる中で、大学内部で IR がどう機能しているのかを分析した先行研究は、管見の限り見当たらない。

### 2. オランダの高等教育と大学評価

#### (1) オランダの高等教育の概要

オランダの高等教育制度の特徴について、いくつか指摘しておこう。一点目は、研究大学と職業大学の二元制システム (デュアル・システム) である。研究大学 (WO) は、主に研究を目的としており、学校数は 14 校、学生数は約 20 万人である。学生は、18 才以降入学し、標準年限は学士 3 年、修士 1 年である。他方、職業大学 (HBO) は、専門職教育を目的としており、学校数は 41 校 (政府支出ありのみ)、学生数は約 36 万人である。学生は、17 才以降入学し、標準年限 4 年である。職業大学の卒業生は、「技師 (ingenieur)」、「学士 (baccalaureus)」などの資格を取得し、研究大学の修士課程への進学も可能とされている (数値はいずれも 2006 年)。二点目は、政府の関与のあり方である。オランダ政府は、政府文書「高等教育における自律性と質」(1985 年) 以降、それまでの厳格な規制・統制から、高等教育機関の自律性を尊重する方針に転換した。その反面として、定常経費の削減・競争的資金拡大とともに、評価という形で各機関の説明責任を求めている。ただ、過去の厳格な規制・統制の経験や、大学が少数で小規模であるため、機関レベルの評価よりも、プログラム・レベルの横断的な評価が優先して実施されている。三点目は、政府と個別大学の間位置する中間組織の存在と機能の充実である。オランダには、研究大学の連合体である VSNU (vereniging van universiteiten)、職業大学の連合体である HBO-Raad などの中間組織が存在しており、政府から大学評価に関する権限の多くが委譲され、大学評価の設計・実施や政府との交渉などの活動を行っている。四点目は、大学内部の管理運営体制である。オランダの大学では、伝統的に分散型の運営体制が取られてきた。しかし、大学管理運営現代化法 (1997 年) により、大学への組織構成等に関する権限の付与とともに、大学内部の管理運営体制の集権化が行われ、全学レベルでは運営諮問会議 (大臣指名の学外者で構成) に、学部レベルでは学部長に権限が集中することとなった。

## (2) オランダにおける大学評価

オランダにおける大学評価は、教育と研究ではその主体や方法が異なる。以下、それぞれに分けて概説する。なお、教育と研究の両分野ともに、評価の対象は大学や機関ではなく、学問分野ごとの「プログラム」となる。

### ①教育評価

教育分野の大学評価は、2002年から新しい大学評価システムとして導入されたアクレディテーションが一つのエポックとなっている。それまでは、大学による自律的な大学評価システム（法律に基づく）が機能していた。その特徴は、大学自身による内部評価プロセスを大学協会が外部評価するという大学による「自己規制（self-regulation）」（de jonge & Berger 2006, p.81）的なシステムであった。政府は、こうした大学自身による大学評価システムをメタ評価するだけであり、大学の自律性を尊重したシステムであったと言える。こうした状況を大きく変化させたのが、1999年のボローニャ・プロセスである。これにより、オランダにおいても学士・修士のシステム、さらには質保証システムが求められ、2002年にこの二つのシステムが導入された。ただし、質保証システムとしてのアクレディテーションは、これまでの大学評価システムにとって代わるものではなく、あくまでもこれまでの大学評価の付加的なものとして扱われている。

アクレディテーションは、オランダとベルギー（オランダ語圏）の条約によって設立された NVAO（Nederlands-Vlaamse Accreditatieorganisatie）によって行われるが、オランダにおいて実質的に外部評価を行う組織は NVAO から認証を受けた QANU（Quality Assurance Netherland Universities）と NQA（Netherlands Quality Agency）である。QANU は研究大学を対象としており、NQA は職業大学を対象としている。NVAO による認定（アクレディテーション）は、この二つの団体によって行われた評価の結果を踏まえて与えられることになる。NVAO からの認定を得ることができない場合は、学位授与権が与えられず、政府からの予算や在学生への奨学金といった財政的な援助が打ち切られることになる。

QANU や NQA による外部評価のプロセスでは、各大学による自己評価が前提となる。自己評価の結果は、自己評価書としてまとめられ、QANU または NQA に提出される。提出後に、実地視察が行われ、外部評価の結果がまとめられる。このプロセスにおいては、NVAO によって定められた 6 つのテーマを基に進められていく。それは、1) 目標と目的、2) カリキュラム、3) 教職員、4) 施設、5) 内部質保証、6) 結果である。アクレディテーションは、6年ごとに行われる。

### ②研究評価

研究機関に対する研究評価を行うため、VSNU は評価実施要綱 Standard Evaluation Protocol (SEP) を定めている。自己点検・評価によって行われる研究評価の目的は、主にオランダ国内に対し説明責任を果たすことであると同時に、研究の質保証を行うことでもある。教育と同様、研究評価は研究プログラム単位で行われ、研究プログラムは6年ごとにこれを受けなければならない。評価を行うのは QANU であり、評価委員にはオランダ国内外から分野ごとに著名な専門家が招かれる。海外からの評価委員への説明と情報公開を前提として評価が行われるため、評価書はすべて英語によって記述される。このことから、オランダの研究評価では研究成果のアピールを、国内だけでなく国外に対しても強く意識していることがうかがえる。

研究評価の規準 (criteria) は、質 (quality)、生産性 (productivity)、社会的関連性 (relevance)、活力および将来性 (vitality & feasibility) の4つである。それぞれ規準について5段階評定を行う。特に、2010年からは社会的関連性が重視されている。SEP では、研究成果への利害関係者を学术界、産業界、一般社会に分けているが、近年のオランダでは研究機関の一般社会との関連性を強く問われるようになったからである。特に、今日のオランダにおける社会問題やグローバリゼーションによって顕在化してきた様々な問題に対して、研究成果がどのように関連しどのような貢献ができるのかを説明すべきであるとされている。

### 3. 大学評価における内部質保証への焦点化

オランダの大学評価において、内部質保証（internal quality assurance）は一つのキーワードになる。大学における内部質保証は、自らの活動を継続的に見直すことで、高い質の維持や質の改善を積極的に推進していく活動そのものを指す。フローインSTEINは（2002）、内部質保証システムを構成する要素を図1のように示した。つまり、大学内部において目標設定と評価を通じて PDCA サイクルを機能させる体制を確立し機能させることが内部質保証の活動となるのである。以下、教育評価と研究評価に分けてオランダの大学評価における内部質保証の位置づけを見てみよう。

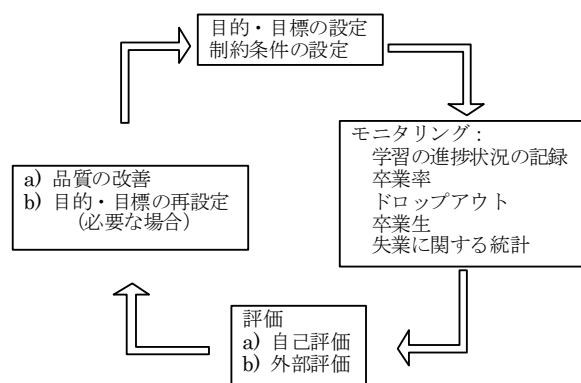


図1：内部質保証システムの要素（出典：フローインSTEIN（2002）、68頁。）

教育評価では上述したとおり、NVAOによるアクレディテーションの枠組みにおいて内部質保証が一つのテーマになっている。しかし、オランダの大学評価の歴史を紐解けば、大学の自律的な活動

を促進するという意味で、内部評価プロセスを重視する傾向にあった。アクレディテーション導入後において、この特徴を尊重するために設定されているのが、この内部質保証のテーマと考えられよう。

内部質保証として各大学に求められている基準は三つ存在している。一つめは定期的評価であり、カリキュラムが目標や他の仕組みに沿って定期的に評価されていることが求められる。二つめが、改善のための手段であり、評価による結果が目標達成に向けた改善のための手段の基礎を形成していることが求められる。三つめは、教職員や学生さらに同窓会や専門分野の関与（involvement）であり、これらのアクターが内部質保証に積極的に関わることを求められる。こうした内部質保証に関する基準を見ると、プログラム自身が自らの質を改善していく取り組みを促進させるものと捉えることができる。

内部質保証から研究評価を見てみる。もともと研究評価は研究機関から自発的に始められた経緯があり、外部評価は6年に1度、制度的に行われるが、3年ごとに内部で自己点検・評価が行われている。またオランダの研究評価は自己点検・評価に加え、情報公開を前提として行われる。この情報公開を行うことが、個々の研究者の内部質保証に対する意識を高めているとの声もある。

オランダの研究評価における特徴として4つの評価規準のうち、社会的関連性と活力および将来性があげられよう。前者については第一節で述べた。後者については、内部質保証の観点から研究プログラムが持つマネジメント力を、PDCA サイクルの実質化も含めて問われていると言えよう。ある研究プログラムがSEPにより低い評価がなされた例があるが、研究機関は逆にそのプログラムの活力や将来性などを評価し、後に重点的に資源配分を行った例もある。

### 4. IRの実態

発表者は、オランダの大学における研究評価の実情および大学におけるIRの実態を把握するため、現地でのインタビュー調査（2010年2月21日～27日）を行った。訪問先は、大学関係団体（QANUおよびKNAW、さらには大学協会であるVSNU、そして大学としてロッテルダム職業大学、ハーグ職業大学、ユトレヒト大学を訪問した。ここでは、インタビュー調査から得られた情報を基に、オランダのIRをめぐる環境を概説するとともに、ハーグ職業大学とユトレヒト大学におけるIRの実態を分析する。

#### ①オランダのIRをめぐる環境

ここでは大きく二つの点を説明したい。一点目が、IRにかかる業務（IRという名前がついていなくても）を行っている教職員から構成される全国団体のDAIR（Dutch Association for Institutional Research）である。DAIRは、1997年に創設され、現在会員数は約150名となっている。活動の主な目的は、会員の職能開発

および IR 活動の促進である。特に職能開発については、年一回のセミナー（年次大会の位置づけ）の開催に加え、毎年特別のトピックに絞った学習サークルを立ち上げている。このサークルでは、経験が豊富な会員が講師となり、4 日間程度の研修プログラムが開催される。研修では、講義だけではなくワークショップやディスカッション、さらにはウェブを通じた学習といった様々な学習が行われる。2010 年は、データウェアハウスに関する学習サークルが企画されている。こうした DAIR の取り組みでは、各大学で IR 活動に従事している教職員のネットワークを構築することが主眼に置かれている。オランダ国内で僅か 150 名程度しか IR 担当者がいない中で、個々の大学では解決できない課題（人材の育成や新しい手法の学習等）に対して、DAIR を通して解決していくという環境が存在している。

オランダ国内の研究者個人を情報単位とするデータベースシステム METIS は、複数の研究機関で利用されている。同一のデータベースシステムを利用することで、データスキームを統一化しなくても良いというメリットがある。しかし、METIS は機関ごとに運営され、他にも機関リポジトリが METIS とは独立して運営されている現状もある。KNAW（王立科学アカデミー）は、このように分散している研究関連のデータベース群の一元化を図ろうと、2007 年統合データベース NARCIS を構築した。ハーベスティング（harvesting）と呼ばれるデータ収集手法を確立し、オランダ国内の研究情報のハブシステムとして運営を開始している。

研究評価における質と生産性の評価にあたり、これらのデータベースシステムの体系的な活用が容易に想像されるが、METIS や NARCIS の開発と運営には研究評価での活用が全く考慮されていないことが判明した。評価委員が個人的にこれらのデータベースを参照することはあっても、QANU や KNAW が研究評価のコーディネイトの一つとして、研究データベースの体系的な活用を推進することはないということである。

## ②ハーグ職業大学

ハーグ職業大学（De Haagse hogeschool）は、

IR は、組織として存在しているのではなく、機能として存在しているという。つまり、Study Success を取り上げよう。このプロジェクトは、

## ③ユトレヒト大学

ユトレヒト大学では学術教育部（Academic affair）において、大学の中期的な戦略プランの原案作成や、理事会における大学経営の計画策定に深く関わってデータ分析をする IR 人材が点在する。学内の組織としては構成されていない。ユトレヒト大学の IR 機能は、財務情報の分析を出発点にし、大学経営に関わる教育研究情報の分析も行うようになった。米国における IR 組織のように、学内外からの大量の報告業務に IT を駆使してデータ分析を行うのではなく、主に理事会や学部執行部に対し、大学の財務情報や学部経営に関する情報の提供を主に行っている。

## 5. IR が果たす役割

### 参考文献

- ・ 林隆之（2006）「オランダにおける大学の研究評価の展開」『大学評価・学位研究』第 4 号、39-50 頁
- ・ フローインステイン（2002）米澤彰純・福留東士訳『大学評価ハンドブック』玉川大学出版部。
- ・ 森雅生、佐藤仁、高田英一、小湊卓夫（2009）「アメリカ型 IR の日本における実現可能性」日本高等教育学会第 12 回大会発表資料。
- ・ 米澤彰純（2000）「オランダの大学評価の動向と課題」米澤彰純編著『大学評価の動向と課題』（高等教育研究業書 62）広島大学大学教育研究センター、41-49 頁。
- ・ Marginson, S., Weko, T., Channon, N., Luukkonen, T., & Oberg, J. (2008) *OECD Review of Tertiary Education: Netherlands*, OECD.

- ・ de Jonge, J., & Berger, J. (2006) *OECD Thematic Review of Tertiary Education: The Netherlands*, EIM (Onderzoek voor Bedrijf & Beleid).

\*本研究は、平成 20～22 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「国立大学法人における PDCA サイクルの構築に向けた経営支援の実践的研究」（研究代表者：高田英一）の研究成果の一部である。